

本と社会



●発行元 人文ネットワーク ●印刷 神谷印刷(株) ●事務局 (株)新評論編集部内(担当:吉住) 〒169-0051 新宿区西早稲田3-16-28 Tel.03-3202-7391 Fax.03-3202-5832 ✉ jinbun-net@shinhyoron.co.jp

人文ネットワークは、読者・著訳者・編集者、さらにできれば書店・印刷所の方々と連携して、我が国の人文書出版の現実、すなわち、単なる利便性や拙速性や広範性のみで腐心する本づくりの現状を批判し、その現実を改革しようという会です。私たちは、人文書が構想され制作され流通する現実のプロセスの全体を視野に収めつつ、特に制作プロセス、本づくりの現場に注目しながら——つまり我が国の出版の社会的現実における個々の人文書の具体的な生産現場と切り離すことなく——、定期的な読書会を通して一冊の人文書を読解します。それは、人文書の内容の読解と、その社会的な現実存在の理解との連結です。当ネットワークは、本づくりのためにではなく、自らの本づくりのあり方を考え改革するために、まずは著訳者と編集者という当事者同士が出会う場として設定されました。私たちはこの作業を通して新たな現実的知性の発見を目指します。このニュースレターはこうした私たちの活動の一部をご紹介させて頂くのであります。

桑田 禮彰 …………… ジャン=ポール・アロン『新時代人』訳了後、あらためて本書の核心について考える

巻頭言

もうひとつの哲学的人間学

フランスのユダヤ人の役割

④ 氷河期にある文化の病い

ジャン=ポール・アロン『新時代人』によれば、フランスの現代文化は氷河期にあり、深く病んでいる。その原因は、芸術に対する文学の支配、そして文学に対する学術の支配にある。この時期に文学は、論壇・文壇の管理下にある雑誌・討論会・サロンを通じて、「文学の機能の容赦のない解体へ行き着くと同時に、ソフィストたちの君臨というばかげた事態へ行き着くことになるプロセス」(p.26)の中で、学術的な理論性を身につけつつ、「生きられる現実」を受け止め表現するためのユーモア・神話性・言い落しの感覚を失っていく。

また同じ時期、文化人は、大戦中のユダヤ人に対する、あるいはプロレタリアに対する有罪意識に突き動かされ献身的な政治行動に出るが、その政治行動は非現実的で偏り、むしろ文化の病いを悪化させるものであった。

⑤ 殲滅収容所に通じる感性の人間嫌い

こうした文化の病いの根源は、「事物を捨てて言葉を取り、現前を捨てて幻想を取る」(p.15)感性の現実逃避・人間嫌いにある。実在を排除・隠蔽・無視し、逆に「見せかけ」を実在として提示することによって、空虚なニヒリズムを伝播させるこの感性は、剥き出しの感覚・感情・情念を拒否し、不安をやり過ごし、文明・主体・歴史から眼を背ける。

この感性は、たとえばジュネの作品の「オプラートにくるまれた暴力とか、花飾りで覆われた卑劣さとか、饒舌で凝りに凝った言説のうわべの輝きとかの中に、興奮作用と鎮静作用を合わせ持つ麻薬を発見する」(p.59)。

著者アロンは、こうした無菌状態を好む感性が殲滅収容所に通じていることを示唆している(pp.15-16,228)。要するに、この感性が背を

向けているのは「人間的現実」であり、問題になるのは「人間」なのである。

⑥ 人間的現実についての根本的思索

特にカント『実用的見地における人間学』(1798)以降、三木清『哲学的人間学』(未完。1937頃)、フィンク『人間存在の根本現象』(1955の講義。1979刊)、サルトル『弁証法的理性批判』(未完。1960)などを経て、フィロネンコ『ヨーロッパ意識群島』(1990)に至るまで、「人間」と「人間的現実」について具体的かつ根本的に語る試みは、哲学的人間学と呼ばれる。

哲学的人間学は、哲学が根本的思索であり続けつつ具体的であろうとするところに本質を持つから、同時代の人間的現実の問題を受け止める。たとえば、三木、フィンク、サルトルはいずれも、そこでマルクス主義の問題に取り組んでいる。とりわけ殲滅収容所以後たる現代にあって、「人間」「人間的現実」についての具体的かつ根本的な思索が、あいかわらず哲学的人間学に課された仕事だとすれば、その哲学的人間学は、たとえばフィロネンコのように殲滅収容所の問題を直視し、そこから戦争・排除・殺人・飢餓など「人間的現実」の具体的に普遍的な問題に取り組まなければならない。そうしてはじめて、哲学的人間学は普遍性を獲得することができる。

⑦ フランスのユダヤ人の役割

ユダヤ人の著者アロンは本書で、殲滅収容所にはほとんど直接触れず、むしろフランス文化人のユダヤ人に対する過剰な有罪意識を、フランス現代文化の病いとして語った。アロンにとって殲滅収容所問題は、「ユダヤ人が贖罪のいけにえを乞う」(p.322)ってフランス人の有罪意識を煽ることによってではなく、いま殲滅収容所に通じる「人間嫌い」の感性が「思

想という高尚かつ普遍的なやり方で押しつけ」(p.16)る「見せかけ」のうちにフランス現代文化の病いを暴くというかたちでこそ、取り組むべきものであったように思える。

実際アロンはフランスのユダヤ人の役割を、人類に開かれた普遍的なものとしてこう述べる。フランスで「責任あるユダヤ人であるということは、[中略]アブラハムが子孫に伝えた普遍性に対する渴望を捨て去ってしまうことではなく、他者を積極的に受け入れる集団の一員としての役割を十全に演じることである。[中略]そうした役割を果たすことが、ユダヤ教を危機にある人類の現実 [=人間的現実] に挿入することになるのである」(p.330)。

著者アロンにとって、本書でフランス現代文化に巣食う感性の「人間嫌い」を徹底して批判することは、殲滅収容所問題を受け止める彼なりのやり方であり、そのことによって普遍性へ向かうもうひとつの哲学的人間学を素描する彼なりのやり方であり、結局それがフランスのユダヤ人として普遍性をめざす役割を十全に演じきる彼なりのやり方であった。そしておそらく、哲学的人間学の試みは、必ず未完・断想・素描に終わる定めにある。

(くわた・のりあき 駒澤大学教員/現代思想)

新時代人 フランス現代文化史メモワール

ジャン=ポール・アロン/桑田禮彰・阿部一智・時崎裕久 訳

著者自身による同時代(第二次大戦終結後40年間)のフランス文化界についての証言録。哲学・文学から美術・音楽・演劇・映画等における諸領域が網羅され、同時代のフランス文化の全体像がくっきりと浮かび上がる。炙り出されるのは、文化の輝きの背後に巣食う深刻なニヒリズム。今に通ずるこの文化的冷気を徹底的に批判し、その克服への道を力強く提示している。(496p)



新評論 3990円

われわれの「新時代」とは 何だったのか？

「人間的なもの」の知覚をとりもどすために

7月25日から翌日にかけて、奥多摩の御岳山での恒例の合宿（第77回例会）には、当会メンバー12名のほか、アロン『新時代人』の記者として、阿部一智氏と時崎裕工氏が参加。同じく記者である桑田禮彰氏の示唆に富む報告「ジャン＝ポール・アロン『新時代人』を読む」の後、活発な議論がおこなわれた。以下はその要旨の抜粋である。（編集＝白石）

「人間の顔」を求めて

桑田 これまで自分の著書・訳書は、いったん上梓した直後は、ちらっと開くのも嫌なものだったが、今回の『新時代人』の場合は違って、今も繰り返し読み返している。長期にわたる訳業は難渋したが、訳了で本書を「味わいきった」とはとても思えず、今後も折にふれ参照し続けると思う。

アロンはフランスの現代文化の流れを「人間の顔」が失われる過程として描き出す。文化は、人間の能動的な表現活動と受動的な感受活動から成る。そして「人間の顔」とは、そうした表現＝感受という人間の文化活動全般が収斂する象徴的な身体部位であるから、「人間の顔」の喪失とは、人間の文化活動の根本的な衰退のことであり、結局は「人間」それ自体の喪失を意味する。

その「人間の顔」あるいは文化的「人間」を回復させようというこのアロンの試みは、実存主義の側からの構造主義批判の一つのかたち、もう一つの人間学と見なせる。たとえば、本書最終章のマネ論を再読して頂きたい。

マネの『バルコニー』の方へ

阿部 マネの『バルコニー』には、ただごとでない雰囲気がかたよっている。すくなくともいえるのは、余計なものをとりさるほど、豊かさがみちてくるということだろう。それは、時間は詰め込むほどからっぽになるという、ベルクソンの認識とも響き合う。

はじめはアロンの怒りのありかがよくわからなかった。だが、言葉と、言葉を超えるものとの対比を念頭においたときに、本書がずっと読めるようになった。言葉を超えるものとは、たとえば「差異」だろうが、構造主義が想定する差異一般というようなものはない。どのような差異であれ、そのひとつひとつが特異なものであり、しかもわれわれは、そうした差異自体を言葉にできなくても、直接に知ることができる。

本書の邦訳がいまでることには深い意味がある。もはや差異一般にもとづく欲望の経済は回らない。「簡素な生活」というような存在様態が浮上している。1984年の時点で構造主義を批判する本書がわれわれに示しているのは、マネの絵のように余計なものをとりさり、ひとつひとつの差異の豊かさに向き合うことだろう。それは来るべき文明のためのニヒリズムの克服へとつうじていると思う。

1984年の未来

時崎 本書が刊行された四半世紀前にはみえ

なかったことが、いまだからこそみえてくるものがある。アロンは構造主義だけでなく、いわゆるポストモダン系の思想家にも、「生きられる現実」から容赦ない批判をあびせる。若かった私は苛立ちすら感じた。だが、何度か読み返すうちに、全体の構成からしても、比類のない書物であると思うようになった。自分自身の言葉で思想や文化を語り直し、同時代のあらゆる事象にふれている。そこには理論的な整合性よりも、なにより倫理的な方向性があり、戦後から80年代にかけての本書の持続そのものが未来への呼びかけになっているのではないか。

岡山 本書の舞台の一部である70年代から80年代にかけて、文化的な流行のなかにいるかぎり、アロンのこのような「ニヒリズムの冷気」は感じなかった。だが一方で、新自由主義への転換も確実にすすんでいた。そうしたなかで、アロンはフランスに生きる人間として現実を切実にとらえている。当時威勢のよかった連中でも、ソレルスなどは、いまや老醜をさらしているだけのように思える。クロノロジックなメモワールの形態をとる本書は、時を共有できるひとへの呼びかけであり、そこからの展望をうけとめたい。

読書会の模様
2009.7.25

中世の新時代人

岡山 茂（早稲田大学教員／文学）

ヨーロッパの中世において乞食は聖なる者とみなされ、それに施しをすることは救済をもたらすとされた。ところが中世の末期になると、働く能力があるにもかかわらず乞食をしている「偽乞食」が追放され、そうでない「真の貧者」は救済院に收容されるようになる。こうして近代も、「ベーシック・インカム」をあらかじめ封印するかたちで公共の福祉を行うようになる。ところで田中峰雄の『知の運動』（ミネルヴァ書房）によれば、このような変化は、パリ大学神学部の教授たちが托鉢修道会を大学から追放しようとしたときにすでに始まっていた。彼らはトマス・アクィナスの才能に嫉妬し、彼をはじめとする托鉢修道会の教授たちを「偽の貧者」と呼んで攻撃した。その論理を世俗権力は社会に適用したのだという。アロンの大学人への秘められた憎悪には、それなりに深い理由がある。

それでも1968年は存在した

大野英士（早稲田大学他教員／文学）

アロンは『新時代人』の冒頭にヘルダーリンとユイスマンズという二つのエピソードを掲げている。本書の題名が特に後者の近代人＝新時代人に対する痛烈な揶揄から取られていることを考えれば、フランスでは、ユイスマンズが彼の死後20世紀前半を通じて、特に、カトリック＝右派の知的・倫理的な師表の役割を果たし続けたことを確認しておくことは無駄ではあるまい。アロンは、新時代人が「神」と「実存」を「構造」に拡散させたことを、彼ら「新時代人」たちの、卑近で成り上がりり的な日常の挙措をも含めて批判的にしているのだ。しかし、アロンが批判する構造主義・ポスト構造主義の時代を通じて、性と言語とが絡み合った生政治の次元で、巨大な新時代が始まったこともまた、見逃してはならないだろう。1968年5月という輝かしい空騒ぎを通じて、フランスでもまた日本でも、ある「革命」は成就されていたのだ。

イメージ VS 実存

石黒りか（文筆家）

アラン・ロブ＝グリエの作品をどうとらえるかは読み手の持つ視点にかかっている。文字の接触で生じるイメージ豊かな世界ととるか同列の単語の羅列による無機質な世界ととるか。アロン氏は後者の視点から、ロブ＝グリエは「創作者ではない」と突き放した。「虚無から存在への大いなる飛翔」という語義は「彼の作品には当てはまらず」、その作品の中で「見えるもの」は「厚みのない外面性に還元されてしまっている」と評した。しかし、その物差しはアロン氏の個人的体験に基づいて構築されている。これを理解するには彼の人生をひもとく必要がある。それ無しに『新時代人』独特の切り口を明示することは難しい。それは矛盾に満ち、流動し、感情的である。実存主義を主軸とし、アロン氏の生々しい人間存在そのものを中心に構成され、その意味でロブ＝グリエの様式とは対照的である。

「引用の快樂」、あるいは時代の正しい読み方

李 鳳新（中・仏翻訳家）

現代フランス文化を多岐な領域に導いた人々を登場させながら、社会の風潮と影を再現した難読な『新時代人』。アロンがこの本に披露した文筆は、19世紀のドーミエの風刺画を思わせ、初期のクレーの細密な銅版画にも酷似している。

時代を検証するこの本が「引用の快樂」という読者の楽しみを奪っていく。だが、遺言状の覚悟で書いたこのメモワールには、そもそも読者に挫折感を与える意図や必要などないだろう。翻訳開始から20年。「歴史の目撃者」が本に記した真の意味を理解するまで、そして文化の重鎮らを痛烈に批判した理由を理解するまで、訳者たちの営為は妥協することなく続けられた。アロンが残した20世紀の遺産は、学問の昇進に没頭する人々と時代に無知だった人々を、きっと「引用」の癖から目を覚まさせるだろう。特に、複製だけが得意のこの時代に。

「生きられる現実」は魂の諸状態の描写がおさえられれば、
それだけで豊かに表現される。……………『新時代人』p.424

大野 言語で語りえない世界に言語で迫ること。それが構造主義ないしポスト構造主義の問いであり、そこには言語と生をめぐる葛藤があった。本書はその葛藤の苦しみをあばくようなかたちで問題を露出させている。とりわけ70年代以降、生の言語への解体が祝祭的な「解放」とみなされたが、それが今日におよぶネオリベラルな趨勢の台頭と密接にむすびついていたことは、いまやはっきりと自覚すべきだろうし、本書はその真摯な証言として読むことができる。

翻訳、あるいは生きられる時差

生江 本書には女性は何人でてくるだろうか？ おそらく彼はあまり女性には興味がなく、そうした意味でも誠実な証言だと思う。とくに気に入ったのは、ワインを飲みながら語っているような、文章の破綻のないリズムである。訳業の妙のなせるわざだろう。

石黒 固有名詞が多くでてきて翻訳はたいへんだったと思う。アロンが批判するヌーヴォー・ロマンのある部分は私もあまり好きではないが、その理由がわかった気がする。生を言語によって構築する一方で、現実には派閥形成をおこなっていることへの嫌悪感を訳文はうまく伝えている。

李 翻訳には時差は必然的なものだろうか、それは書くこと一般についてもいえる。そして時差があるからこそ、手にとるようになることもあるのだと思う。大切なのはその時差を生きるほかないということである。アロンもまた、

特定の文化状況を時差のなかで書いている。本書が長いメモワールのかたちをとっているのも、生きられる時差のうちに、現実がとらえられて二重になっているからであり、そこに翻訳の時差も加わり、文字通り真性さの厚みをましているのではないかな。

「新時代」批判のために

入江 これはフランス現代思想の解毒剤になり、当時の「文化人仲間」の関係性がよく描かれている。細密な記述によって、時代を超えて記号の消費の苦々しさというものが表現されている。そうした意味でも、ある種の疎外論として読めるのではないかな。それは理想によって現実を糾弾するというのではなく、理想と現実の関係そのものを問い直すような疎外論である。さいごのマネへの言及にそのヒントがあるのかもしれないが、あらためてバタイユのマネ論を読もうと思った。

ナニボウ 「新時代」的な価値をもとめるときに陥る「病」がある、という指摘はとても参考になった。安全、安心、権威、無菌、教訓、実用、理論、技術、禁欲、新しさ、等々。なにかやろうとするとときに、こうしたものはつねに障害となり、いまも「新時代」なのだと感じることはいろいろとある。そして本書には「新時代」との闘いの具体的な諸相も書き込まれていて興味深い。

永田 言語批判、さらには実存主義からの構造主義批判。これが本書の要諦だろうが、そうした「新時代」批判はつねにおこなわな



ジャン＝ポール・アロン
Jean-Paul ARON (1925-1988)
フランスの歴史家・作家。1925年生まれ。ストラスブール大学卒業後、国立科学研究中心、リール大学等を経て、77年より社会科学高等研究院主任。歴史研究の専門は特に19世紀以降のフランスの文化史および中産階級史。邦訳『食べるフランス史』(人文書院 1985/原書1973)、『路地裏の女性史』(編著 新評論 1984/原書1980)。
◀ 晩年のアロン。本書カバーより

ればならないものだと思う。そこであらためて問題になる「人間」という概念の刷新を、本書は求めているように感じる。

白石 本書のはじめにゲーテの引用があるが、これは当時「アカデミー論争」と呼ばれた色彩をめぐる論争にかかわっている。ゲーテのライフワークはニュートン物理学を否定することだった。ニュートンにとって色彩は光の屈折にすぎない。だが、われわれは色彩のなかに生きているのではないかな。こう晩年のゲーテは繰り返し問いかける。

だから本書がマネの『バルコニー』への言及でおわることは偶然ではないだろう。この「新時代」のメモワールは美学的なモチーフにつらぬかれているのであり、それは「新時代」への批判が美学的でしかありえないことを示している。そして同じ「新時代」を生きているわれわれにとっても、その「精神の現実」(ブルースト)はわからない。遠近法を斥け、感覚の湧出の遍在を肯定すること。「新時代」批判とは、なによりマネとの対話から発動されるような挙措であるはずである。

ネオリベ…もう一つのニヒリズムの冷気

生江 明(日本福祉大学教員/社会開発)

動かぬ写真の中で、椅子に腰掛けたアロンが、少し気取り気味の表情でこちらを向いて微笑んでいる(上掲写真)。時代は彼の中に呑み込まれ、その笑顔を残して立ち去っていく彼。アルザスのフランス人として生き、そしてエイズに感染したことを宣言して死んだユダヤ人の人。その彼が言い放つ、「妙に元氣」な「ニヒリズムの冷気」を振り撒く人々。対象を解体し、分析し、そして構成しなおすことで、あたかも縫合後の死体が世界を再び元氣よく歩き始めるように、得意げに世界の原理を語る人々がいた。短期的な利益の連続こそが長期的な利益を保証する構造であると、シニクな物知り顔で教訓を声高に語る人々が、足早に21世紀の新世界を支配し、早くも崩壊の粉塵の向こうに隠れようとしている。笛を吹く少年をマネの絵の前で凝っと見つめるアロンなら、何と云うのだろうか。

文化の「同時代」史——文化史家自身による

入江 公康(文教大学他教員/社会学)

個々のエピソードを編年で並べ、一見些事とすら見える取っ掛かりを逃さない。「同時代」的に書き継いだか、のちに想起して書いたか。史家であるからには後者でもおかしくない。若干は耳にしたか、まだ知らぬ、かの国の「文化」のトピックがその微視により一層腑分けされ、ここでは理論と批評と政治と俗事が混合する。人の布置、談博かつやや辛口な喩と形容(詞)の多用、トピックの側からあくまで綴るその筆致は、登場人物の言動と行為が、場の政治的・具体的、ときに集団の儀礼や習慣に、または各人の癖のレベルにまで還元され、「文化」に相貌を加える。

史家はニヒフィアンを容易に信じない。性だ。そして「新時代」においては言葉が物の表面に掠り傷ほどしかつけれられない。そういう時代(そしてモード)の「文化」をそう眺めたアロンという人物があり、それが「文化史家」たる所以だ。

ダンディの不機嫌

永田 淳(早稲田大学生協ブックセンター)

J=P・アロンの死を告げる記事は彼をダンディと呼んだ。ダンディとは教条に従順なエレガンスと、身なりの技術をひけらかす俗物のことではない。ブランメル、シャトーブリアン、ボードレールら——ダンディとは、多数に対して単独であることを旨とし、労働や貯蓄、進歩を嫌悪し、のぞき見＝公共の中で秘密と沈黙をつくりだそうとする者たちのことだ。移ろうものの一瞬の煌きをとらえることができない下司どもに常に苛立ち、冷笑と尊大さをもってダンディは反撃する。しかし進歩を信仰する下司どもの愚かさほどに彼/彼女らは革新性を持ってはいない。だからいつもダンディは、われわれが微弱なメシア的能力を発揮するために参照する敗北者の名前として記憶される。だがわれわれは繰り返しこの不機嫌と憂鬱を呼びだすだろう。記号の体制に対して夢をくりひろげるために。めくるめくこの現実のために。狂乱のために。

市民だけじゃしょうがない

ナニボウ(ミュージシャン)

ロバート・ワイアットは「それは街中に広まったただの噂」と歌う。そして「ただの噂」に参加するのは、もう辞めたらどうだろうと促しながら、噂が引き起こした戦争に駆り出され、海兵隊に入って死ぬのなら「真珠でもとってるほうがいい」し、その可能性もあると歌う。誰かがいった誰かがやらねばならぬのだ、という噂のために戦争に駆り出される若人も多い。噂に含まれるニヒリズムの流行は、様々な形となって人間をよく殺すだろう。

ホームレスを殺すのは市民であると言ったとき「市民」とはワイアットが歌う「ただの噂」である。市民が「人間」を殺すのは、己のニヒリズムを隠蔽するためだろう。誰かが「誰か」とか「みんな」といったとき、その言葉が市民よりも広い「人間」を許容するのかを考えよう。アロンの文章を下って行って、そう思った。



特別寄稿

マネのパレットのように あるいは簡素な生活を求めて

◎ 阿部一智 (女子美術大学教員/哲学)

パリに散在する、そう多くはないマネの絵を見てまわるうちに、ふと、マネのパレットがありありと脳裏に浮かんだ経験がある。中間色をあらかじめ排除して原色だけを残した簡素なパレットである。ドビュッシーが、半音を排除した全音階によって、あの独特の浮遊感の表現に成功したように、マネも不完全なパレットを自らに課すことによって、かえって、創造的たりえたのではないか。そして、結局、ジャン=ポール・アロンをして「彼のキャンバスには一枚として同じものがない」と言わしめたのではないか。これはたんなる想像である。しかしアロンの『新時代人』を論じるきっかけにしたい想像である。要は、「かたち」と「なかみ」の関係という問題なのだ。「かたち」とは色であり、音であり、言葉である。「なかみ」とは何か。アロンはそれを「生きられる現実」と呼ぶ。

▶ **生きられる現実** 「なかみ」は「かたち」を超えていながら「かたち」によって表現される。訳者は、このことを、ベルクソンから学んだ。私たちが両者の関係をあれこれ詮索する前に、その関係そのものが意識に現前するのだということベルクソンは私に気づかせた。運動がそうであり、メロディがそうである。離れたふたつの光源が交互に点滅すると、私たちの意識は、たちどころに両者の間を往復運動する彗星の様なものをみとめる。運動は点滅なしに意識に与えられないが、点滅に還元されることもない。還元されない証拠として、この彗星には色も形もない。メロディがどんな楽器の音でもないように。

かりに「かたち」の背後に「なかみ」と言えるようなものが何も無いとする考えをニヒリズムと呼ぶとすれば、私たちは、ただ生きて意識を働かせているだけで、ニヒリズムを免れていることになる。困難なのは、運動体と運動とを、音とメロディとを正しく「区別する」ことである。そのためには、件の彗星を錯覚として切り捨てない無邪気さが必要である。「錯覚」という言葉をその出所に向かって投げ返す勇気が必要である。反発する常識を合理的推論によって説得する忍耐が必要である。これらのことを表現者なら誰でも知っている。さらに、生活者自身が表現者である。生活を、私の生き方(かたち)と私自身(なかみ)の関係における、自己表現の営みと捉えることができるからだ。しかし努力には疲弊が伴い、疲弊には慰安が忍び寄る。ここまではベルクソンもアロンも同じである。

▶ **来るべき文明のために** アロンにはベルクソンが知らなかった現代資本主義に対するまなざしがある。実は、生活が自己表現の営みであることを説教するのは現代資本主義経済そのものである。そして、「かたち(私の消費の仕方)」のうちに「なかみ(私自身)」が最初からバックされているかのような商品を彼らが売り込むことはいかに巧みであることか。人々は割れた花瓶のどんな小さな破片にも殺到する。現代の説教家によると、割れる前の花瓶があなた自身だったというのだから。かくして、疲弊と熱狂、慰安と熱狂が同居する奇妙な生活が私たちの常態となる。これは新しい迷路であるが、ベルクソンとアロンがともに眺めやる同じ方向に出口があるだろう。つまり、私たちは、来るべき文明のために、無邪気さと勇気と忍耐をもって「私の生き方」と「私自身」を正しく区別すべきなのだ。そのとき、間違いなく、生活は簡素なものとなる。マネのパレットのように。(あべ・かずとし)

特別寄稿

遙かな視線

『新時代人』の訳業を終えて

◎ 時崎裕工 (暁星高校教員/文学)

今回の翻訳の経験を航海にたとえるなら、初めての太平洋横断にボートで臨み、しかも出港早々そのボートのあちこちから浸水が始まり、その修繕に追われるうちに外海の荒波に揉まれ、メデューズ号の筏のような状況に陥り、長い漂流の果てに、後に共訳者となる大航海の先達二人に救助されて、無事生還を果たせたということになる。むろん、それまでにさまざまな手を差し伸べてくれた多くの諸先輩たちの温かな励ましがなければ、漂流すら不可能であったと今にして思う。

さて、この『新時代人』。自分の読解力の未熟さを棚に上げながら勇気を出して白状すると、読み始めてから暫くの間は、「現実」を「言葉」に従属させる風潮に対するアロンの批判に新味を感じられなかっただけでなく、その立ち位置一本槍の戦法であらゆる対象を論難していくスタイルには大きな疑問を感じずにはいられなかった。すべてを統一コードに送り返し、様々な差異を無視してレッテル貼りをするような人々に徹底的な批判を浴びせるアロン自身が、まさにその轍を踏んでいるのではないかと。

ところが、何度も何度も読み直すうちに、その印象は徐々に変化していった。おそらくアドルノなら、これぞエッセーと評したであろうような極めて上質な文学作品として私の心に迫ってきたのである。

おそらく、その魅力に彩りを添えているのは次の三つと思われる。①現在形の語りによって出来事の現場に居合わせたかのようなライブ感を読者にあたえる、その叙述スタイル。②みずからの体験と意見を縦糸にし、多くの人々の証言や著作からの引用を横糸にすることで織り成される、読み物としての楽しさ。③濃密かつ整理された情報を提示する手際を感じられる、ユーモアのセンス。

ところで、アロンが想定した読者とは誰なのだろう。もちろん同時代のフランス人、であるはずだが、それならば、これほどまでの情報量(取り上げられた人物だけでも1000名を越える)は必要であったのだろうか。外国人にも理解できるように、という配慮なのか。

私には、遠い未来の人類に向けて書かれたような気がしてならない。その視線には、ニーチェの「星辰の友情」にも通ずる遙かさが感じられる。訳書完成本を改めて読了し、肅然とした気持ちになる理由はその辺にあるのかもしれない。(ときざき・ひろのり)

状況雑感

麻生太郎讚

■ 蔵持不三也 (早稲田大学教員/文化人類学)

2009年8月30日パリ、モンパルナス。TVニュースが自民党長期政権の崩壊を珍しく熱を入れて伝えている。予想されていたこととはいえ、この崩壊劇は刺激的である。だが、真の勝利者は民主党ではない。むろん麻生太郎である。一介の凡庸な政治家が我が国憲政史上に残る「偉人」となったからだ。ポピュリズムに期待しながらついにポピュラーになれず、かつて六奉行のひとりだった自民党の実力者のように、傲然と「政治は最高道徳の発現である」などと言い放って、周りを唾然とさせるほどのトリックスター性もない。だが、一国の最高権力者として、彼は日本語の、とくに漢字の難しさを我々に身をもって教えてくれた教育者であり、「責任力」などというおおよそ自分とは縁遠い言葉を、あろうことかその政治哲学に刷り込んで票を集めようとした思想家であり、何よりも自分の苛酷な生活と現実が、不可視の政治に由来するという、つまりそれほどまでに政治と生活とが密着しているという政治の構造的なパラドックスを、多くの日本人にいやというほど思い知らせてくれた掛け値なしの政治家だったといえる。舞台の上の権力とは、フランスの政治人類学者G・バランディエの用語だが、麻生太郎はまさにその愚鈍なまでの政治的感性と裏芸を駆使して舞台の上の権力を弄ぼうとし、逆に弄ばれた。だが、それを非難するのは間違いである。まさにそれによって、彼は政治のなんたるかを、こう言ってよければ「生政治」の本質をリアルタイムで国民に開示してくれたからだ。日本の民主主義に対する彼の貢献を、比類なく大きいとする所以である。

編集後記▶ プルーストはサント=プーヴの逸話的な批評に反駁する。作品が作者の延長にすぎないのならば、作品にどんな意味があるというのか、と。だが、プルースト自身、執拗に描いたのは不毛な社交界の「失われた時」だった。その長大な記述のはてに、かろうじて作品に固有の時が見いだされる▶ アロンが冒頭でプルーストにふれるのは偶然ではないだろう。「新時代人(Modernes)」という表題が想起させるのは、「新旧論争(Querelle des Anciens et des Modernes)」という歴史的な敵対の常数である。表現を時代の要請に適應させようとする「新時代人」にたいして、「旧時代人(Anciens)」は古典古代のテクストをたどりつつ、時の隔たりの特異性を生きる能力に人間の証をみとる▶ 問われているのは、時を生きる謙遜そのものであり、アロンの書物に流れているのは、プルーストが見いだした時にほかならない。われわれはマネの絵画にかかると「精神の現実」を感得しているのだろうか? たしかなことは、彼ら旧時代人の反時代性のうちには、永劫回帰という価値の尺度が静かに鳴り響いていることであり、よき生とは繰り返すに値する時を生きるということだろう。それはコンサート後のアンコールの連呼にも似た悦ばしい反復である。

(白石嘉治 上智大学他教員/文学)